

牛首山攻撃

歩四五二二三

歩兵少尉 大宮司 明

十一月十七日崑山附近から南京攻略の目的を以て鞏進しました

第六師團は十二月八日南京城西南方約一里半牛首山(斗山)の敵陣地前一帯附近に到着し敵兵の陣地を右左左左すゝめを跳ぬつゝ晝食を致して居りました

四十五聯隊第一大隊は前衛の命が下りました第三中隊は尖兵中隊を命ぜられたので

才 私は当時第一小隊長でありましたが補充將校で直接の戦斗は三回目でありました 尖兵を命ぜられますや 師團長閣下や

聯隊長殿の目前で全く演習の時の様な氣指で命令を下しました

斗山は丁度二一五米 切り立てた様な山で中腹及八合目には鉄條網を繞らした掩蓋五六を固執することが出ました 又頂上には天然の岩壁を利用し 頑丈な機関銃掩蓋がありました 尖兵が行動を開始しますと各掩蓋の敵は一斉に射撃しましたか 北

支以未突戦の体験豊富な兵は 物ともせず 小隊長の復をとんで来ました 中隊長は敵を頭上に眺めつゝ 展開命令を下達されました 私の小隊は右第一線 斗

山の攻取を命ぜられましたので 命令の復唱は致しましたもの、 どうして攻取したものがと一時は思案しましたが 十四時十五分攻取を開始しました

中腹及八合目の敵は左軍の機関銃の掩護射真に依りまして 難なく退却して 中腹に取りつくと頂上の敵機関銃は私共目かけて猛烈射を浴びせかけました 私に射撃開始を

命せず。死角を利用極力迫進することに
かめました。各分隊とも四つ鉤ひになり山
を這ひ上りました。

七合目の所で田中一等兵は敵弾に咽喉部か
ら臀部まで貫通されました。此の傷を見て
も山の急峻さが判ること、思ひます。

田中一等兵は臨終たゞ分秒の間に迫りなが
ら、俺のことはかまはず、皆前進してくれ
と戦友を勵まし、最後に

「天皇陛下萬歳」

を三唱して他界しました。その最後の萬歳
の声はかすかたやうくき、取れました。
私の眼頭には熱涙が溢れました。頂上の敵
は猛烈に手榴弾を投げてゐる。ハッ、我に
返つた私は

「田中しつかりせよ」

と悲痛な一音を發し、再び前進を続けまし
た。

私は二個分隊の兵を手下に指揮し、敵前四
十米に迫進。軍刀の刃部を右に向け（急峻
な膝を切るため）最頂上に突進を敢行しま
した。時に十五時五分。

敵は七八百米向ふで退去する者と増加
するものが一地点に謂集し、大混乱中を認
め、軽機小銃擲弾筒で片端から雜倒しまし
た。約一千の敵兵は死傷者、生き残る者で
全く黒山のやうでありました。

前園伍長は第四分隊長として部下を指揮中
頭部に貫通銃剣を受けました。夜も亦

「天皇陛下」

とたゞ之つゞき、萬歳と言ひも果てず、戦
場、華と散りました。

死ぬ者は全部が

天皇陛下の萬歳を奉唱します。我が國民は
生れ乍らにして忠節を燃えてゐるので
あります。故國で病死するもの

陛下の萬歳を唱へて死ねる者が果して幾人ありませう

軍人は忠節を盡すを本分とすべし！とこの精神教育の威大さを圖り知ふことかてきます。死際に両親妻子のこと等言ふものは絶対にありません。これこそ日本の軍隊は強いのであります

將兵一九となつて

歩四五、一、二

橋口隊

昭和十二年十二月九日半首山攻塵に方り相堂山頂に中隊（欠一少）を集め、半首山を展望しつゝ、第三高地へ中隊で名林を附す。遂は第三小隊（長木場中尉）其の後は第二小隊（長谷藤中尉）第一線として攻塵

すべく命令を下達しました

愈、攻塵前進——猛烈果敢です。一瞬にして第三高地まで占領してしまひました。然し其の後には各方面から十字火を受け、前進は意の如くなりません。其地で大隊長殿に

「第三高地の薄暮を期し、攻塵せんと意見具申をいたしました。大隊長殿も之を御許し下さいました。

この頃右に第四中隊、左に三中隊より増加され、次の様な命令を受けました。

「第三高地を奪取せば、半首山を討つべし。東は、明朝又、始り準備すべし。中隊は薄暮を期して、第三高地に突入。敵は軽械手榴弾を以て必死に抵抗します。本場中尉の攻塵は敵の意表に出て、敵を突々に刺殺。守兵を一蹴して、目的地を完全に占領することになりました。

本場中尉は迎木蘭介候を派遣して 牛首山の敵情を偵察せしめられた

この時牛首山の敵に動揺の色ありを直感しました 戦場六感とでも言ふのでせう 斎藤 本場両小隊長も同所に在りましたので

中隊長の状況判断 牛首山の敵動揺の色あり この機を逸せず夜襲するを可とす 貴官等の意見如何

と申しますと 両小隊長も異口同音に然りと申しました 本場中尉は それでは我が小隊が此の登前進しますと言ひますと 傍にあつた兵連も 行きませう と早前進せんとして

おます 第二小隊長斎藤中尉は之を見ア 声も激しく

「及此は遠く 第三小隊は第三高地迄がや

これから先は第二小隊の攻めだ

この小隊長の抗議に第二小隊の兵連は

「さうだ」といふからオイドンが番ぢや

と勇み立ちます 中隊長命令 牛首山の敵動揺の色あり 中隊ハ引続キ 牛首山ニ突入之ヲ占領セントス 第二小隊第一線(以下略) 斯くて第二小隊は超越前進 勇敢に奮戦 しました

午後九時 遂に同山西高地を占領することを得たのであります 第三高地占領時の小隊長の意気 之に應ずる兵の意気 之が完全一体となつて 必勝と誓ふ偉大な力となり 此の輝かしい成果を得ることのできたのでありませう

この戦斗に於て 大隊長師團長閣下より 賞詞をいただきました

牛首山
決死の夜 龍巻部隊

歩四五、一、二

今別府准尉

十一月十六日大隊は上海に上陸して師團に追及すべく連日行軍を続けました

そして廣徳で師團に追及し得ました

十二月八日牛首山で中支最初の戦いが開始されました 先づこの日 第三中隊が祖堂山と牛首山の第一回目の攻濶をやりました

中隊はこの時 大隊操備でありました

夕方三中隊は祖堂山を占領しました

十三聯隊は 師團の右第一線で將軍山を攻患してゐました

其の夜は、で明かし 翌朝一二四。再び攻患開始となりました 牛首山からは餘り

弾は来ませんでした 間にたった一つしか殺線がなく これを右往左往して 薄暮

中隊は牛首山の手前まで来たのです

十三聯隊の後方からは野砲小砲等を射つてゐるが 一向利かない それに山は却々志峻であります

こゝで中隊長は夜襲を決意され 各小隊へ二個小隊から乍假 夜襲部隊を編制されました 全員参加したいと申出て人選に困った程でした

すると三小隊の西原上等六が猛烈に

是非やうて下さい

と懇願して来ましたが 参加させましたか

此処で頭部貫通銃創を受け名譽の戦死をとげました 彼は戦友の遠矢上等兵に 後

め小紙片に留守担当者の住所氏名を書いて渡し

「俺が死んだら後のことを頼むし」と言つ

で勇躍出發したのでした

この夜の作戦の報告に依り、中隊は主力を以て遂にこの山を占領し、翌朝師團主力のもとに復歸しました

この時の行軍は、長い一本縦隊で、私は最後尾でした。先頭の方は、飯を炊く暇もあり休憩し、又部落に宿營できても、私達にはまるでそんな餘蘊がなく、前に追及することゝ急いで休憩も出来ず、飯を炊くにも僅か十四五分、炊き上げて食ったり、又宿營も出来ず、道路にえ、ま、引くり返って寢たのであります

この時の辛さも亦忘れられません

石原伍長の奮戦

歩四五二 二中隊

牛首山攻襲の朝、中隊は次の區分に依り

決死隊を募りました

1. どうしても決死隊にかりたいもの

2. 命令からは致し方なき者

3. 家庭の状況上出来得れば免せられたいもの

もの

石原伍長(当時上等兵)は第一番に熱烈に決死隊加入を希望して、覺悟の程が眉宇に漲つておました。午前十一時三十分攻襲前進直前、伍長は粗末な支那紙片に自己の素籍地、父の名を書いて

「俺が死んだら、父に通知してくれ」と戦友に渡しました

攻襲前進後は、常に小隊の先頭組となつて

勇戦に前進、第一高地に突入、同地に於て所属分隊長負傷するや、自ら機を失せず分隊を指揮し、特に第二高地突入と同時に

五六十名よりなる二回に亘る猛烈な逆襲に對して、よく地物を利用して、分隊を激勵

我を加へ、逆に之を潰滅しました。然し
第三高地の敵は更に頑強に抵抗します。而
も井首山左頂上及廟附近よりすう瞰制射並
に左右よりの十字火は猛烈です。

此の間分隊の傷者は相次ぎ、遂に伍長以下
十名となる。然し伍長は些も屈する色もな
く、兵員を散在する岩石をよく利用せしめ
て、自ら敵情を監視し、敵銃火の間断を利
用して狙撃に任じ、敵兵少しく現るや、
銃眼の右の敵今裏にてよし引込めし
「よくあたる」と射撃の観測をなし
更に輕機に故障を生ずるや、自介の小銃
を以て狙撃をする。小隊長が敵情視察に未
らや、山背及第三高地に在る多数の敵死体
を示し乍ら

「小隊長殿、とても好くあたります。もう
寸名覽しました」とニコリして報告を
する等その沉着適切なる指揮態度は彈雨の

中に在る者とは思はれぬ程でありました。が
無念一弾は伍長の頭部を貫き、遂に立つ
能はず。衛生隊に收容後、十二日南京陥落
の声をき、つゝ、安らかに佛の御許へ旅立
ちました。

伍長は平素は、賊れる猫か如く、從噴勤務
に精勤、衆の模範とされ居ました。一
度起つ時は全く別人の如く猛虎の勢を以て
事に當るといへた立派な軍人でありました。

南京城を眼前に

吾等は豫備隊

歩四五、五二一

浜田旅尉

南京を攻め落した。之で勝利の祝盃をあ
げらんだ。と大好きな子ヤンチユを水筒に
入れ、飲みたたくて喉がらつばの出るのも我

慢して 水筒を蒸籠になで返しては紛らして
おました 一口も吞まずに ところが
深水に着くと はや南京は陥落したといふ
噂 實際がつかりしてしまひました

そして南京南門攻めに参加 南京の一里ほ
ど手前ところで 敵の砲弾等のため 友
軍がやられるのを無念の ぞしりして眺め
ました 山上からみれば南京城はすぐ眼の
前です 今一息といふところですが
、まで来て予備隊であるばかりに 二十三
聯隊などにとられてしまふのかと思ふと
くやしくてたまりませんでした

演習そのまゝ

歩四五五五二一

内山 曹長

十二月十一日左第一線を命ぜられ 中隊の
尖兵として出ました 作候の報告に依り

本道を迂回することになりました
西進を命ぜられたのが二時三十分でした
そこから三里ばかりのところで 先行して
おた斯兵作候五名が敵襲を受けたとさふの
で 攻撃を八時頃から始めました

敵の弾は面白いやうにくる 友軍の各種砲
はボン／＼うっ 煙筒をたき、何分隊前
のまじとす 型通りの敵陣をやり 開路地
を造れば 敵は堤防上から射つ

ワ／＼コ／＼の百五十米ほどのところまで
に敵はなまいと思ひ前進すると 急に竹垣の
下の藪から猛烈に射ちかけられました 止
むを得ず陣に伏せてかくれておましたか
く懸置たしとさふ風 これではいかんと
一角に突撃を敢行を敢取しました
敵は友軍が近寄りすぎたので 逃げおほせ
ずえいつを我々は二分殺しました

千エッコの四道土産

歩四五 皿一〇

山口軍曹

機関銃は分解搬送し、洋車に乗せて運んだ
りしておました
倉富林鎮近くの路上弁候として行くうち
敵の射撃を受け、尚ゆくと矢射ちかけられ
ました。敗残兵かと思ひながら前方を見れば
橋の上に歩哨らしきものがみえます。九
中隊の者だらうと近寄れば、しきりに手招
をします。木立を過ぎてよく見ると所に虫
る。向ふは支那軍です。こちらに近づくと
して軽機を据えて射撃しましたら、敵の奴
大慌てにあわて、千エッコも何も置いたま
、逃げだしました。退却の後衛尖兵だつ
たのでせう。

敵前大膽な軽機の修理

歩四五 皿一三

歩兵軍曹 寺園哲志

外口紛争が罪カとして降りしきり、視界も
わかりません。雪や氷を珍しがらぬ南國生れ
兵隊達が、ウリウリに一オばかり張りつめ
た薄氷を壊しながら、片足で踏んでみたり
石塊を投げて威嚇してゐる。國は北支以來今
まで、殺戮して来た兵とも思はれませんが
K上等兵は、関羽髯に水滴を光らせながら
体に似合はぬ、やうな細い糸和を余
計細くし、益をなめく
「分隊長殿、おいどんは余計はなまんが
大體酒は好です。千ビく、カ方です」
とさひながら、益をさして、くわも手の大

きいこヒ、私はその手を見て、まだ日も浅
い何庄の激戦を思ひました。

それは丁度昭和十二年十二月十一日薄暮で
した。攻虫直前中隊長殿から、

「今度の戦斗は河北の正定攻虫にまさると

も決して劣らぬ激戦だ。一歩々々落つて
て敵陣に突込んで行け。」

と訓され、高鳴る胸をしづめながら、尖兵
の先頭に立って前進しました。

もの、百五十米も行かぬうちにチエツクの
十字火、手榴弾の雨、斜左後方で

「ヤラレヲ 残念」
誰だったらうと思つた瞬間、「誰だ」と中隊長

長の烈しい声に、「川一上等兵です」と答へ
る。「よおし、復讐に燃えた烈しい気合

間近に炸裂する手榴弾の地響き、敵が来る
弾丸は依然激しくまうで雨のやう

中隊長殿も馳せ寄つて、傷者を慰めてやり

たかつたのでせうが、状況が之を許しませ
ん。そのまゝ、遮二点ニ逃ひ潜つて、未だ馬

残り拳銃を乱射しながら、頑強に抵抗する
敵を突殺し、一氣に第一陣地を占領してし

まかまじた。
危く壊れんとする態勢を鞏固して、敵は第

二線陣地に布陣しました。
私達の小隊は依然第一線、折柄の月明を利

用し行ち構へてみた敵第二線陣地の十余の
銃眼は猛烈に火を吐き初めました。弾丸は

濕地に伏してゐる私達の前後左右に、大粒
の夕立の様に穴を穿つて行く

「左から三番目の銃眼射裏」
の号令も終らぬうちに、軽機射手だったK

上等兵は、銃身も焼けよとばかり猛烈に射
ちだしました。

ところが二。登も射つた頃、平常から倍
頼してゐた唯一の愛銃が突然射撃不能

アッ 故障だ、一瞬狼狽して手銃をばめられて自由を失った様な思ひです。凹地に下って故障排除と自ら小銃を持つて銃の所に腹造って行きますと、大丈夫だ、バタ／＼するなと独言の様につぶやきながら、絶え間なく飛来する弾雨の中に、平常銃の手入をする時やうな風に暮つき、掃つて修理してゐます。腹が立つやら心配やら、故障排除が終る迄の僅かの間のものかしき。かうした事などありながら、又小隊長殿は、いぬ多の戦友を失ひながら、漸く明方第三線陣地を奪取することになりました。余りくよくよ考へたつて任方がない、朗かにやきんですよなめ分隊長殿。と又盃がかくれる様な大きな手で差してくれ、上等兵を前にして、平常はおとなしい煮いごとになると一番強いと痛切に感じ

たのもしく思ひました

機関銃身を擔いで

敵陣に突入

歩四五 Ⅲ 附

歩兵上等兵 知念松三

目指す首都南京は目前に迫りました。我が竹下部隊は、難攻不落と誇る將軍山を、夜襲に依り奪取し、更に餘勢を駆って、夜陰將軍山左方の本道をかた押しに猛進。三イ數回に及び夜襲に成功して、掃蕩までには南京城壁と距一里半の地点に進出したのであります。更に我が竹下部隊が此処から西方に迂回し、南京城内の敵の退路遮断に向つた所のことでありませう。

十日夜間を利用し、江東門方向を下関に向
つて接近し、十一日拂曉南京西方河庄
附近に至り、敵陣地から猛烈な射撃を受
けましたので、早速攻塵が開始されました
敵は退路を失ひ死物狂ひで抵抗していま
す

大隊長殿は意を決せられて、この敵を裏破
すべく前進命令を下されました。機関銃の
私達は、第十一中隊に配属せられました。
敵は、チエツクの独射を以て我か前進を
阻止し一向退却の様相もありません。更に
之に内迫すると、敵も我が包圍攻塵に逃げ
道ないと思えて、依然陣地に在って抵抗を
つづけておます。地形を利用し、之に接近
小銃中隊は之に突轟、機関銃も板を失せず
之に続き突入しました。

小隊長三輪中尉殿は真先に刀を抜き、斬り
込まれました。私達も銃剣を片手に、片手

で押しつかずと銃身を構いだまひ陣地内に
突込ぬば、色を失つた敵兵は絶念したのか
逃げようとしせず呆然としてゐる。それを
剣で突きました。

尚退却する敵はクリーリの中、に能び込む
の。道路上を城内方面に逃ける者著ありま
す。之を発見した私達は銃身をかついたま
ゝ追がけますが、却て逃つことが出来ま
せん。其の距離僅か十五米餘です。肩にあ
る銃身のため思ふ様に走れません。追つか
けるのを諦めて、銃を揺え、逃げ廻る奴を
片っぱしから刺倒しました。
此の戦いは私達が幾度となく経験したうら
で最も痛快な戦斗でした。

歩四五、二、六
いづみ
ぶつたぎ、前に突偵口を割り
(魔風呂)

何庄附近から

上河鎮まで

歩四五ノ皿所

歩兵軍曹 西 盛義

徹夜行軍七〇里を突破した我々は 將軍山の敵を討ち大定坊附近の民家に火休止を命ぜられました

僅か三時間の休を利用して 戦友達はもう死人の様に深い眠を貪って居ります

敵前露営のことゝて火を焚きことは許されません 全身の汗は夜の寒気で一層冷たく身が氷結しさうでやりましたので 窓開けた室内で机や椅子等を壊して焚火しながら暖をとりました

明け十二月十一日 この朝一面霧深く

機動轉進にはもつて来いの朝でした その霧の中を何庄に向つて田圃の畦道づたひに攻め前進に移りました 水田は草が乾いて居ますが 車輛部隊の通過は困難です 機関銃小川小隊は前川隊(九中隊)に配属され 我々部隊主力は三輪小隊の二ヶ小隊であります

午前九時攻め開始されました

何庄に通ずる本道上や堤防の附近には無数の掩蔽銃座が 不気味な銃口を開いて待機しておます

小銃部隊が攻め前進する間を我々が銃眼を制圧しなければなりません 敵の出鼻をやつ、けようと 不意に一着に猛射を浴せかけました

沈黙を守つてみた敵の銃眼からも之に應じて盛んに射下出した その中を田中隊令研

隊の戦友達が、着剣して一人づつ、弾丸のやうにとんで行く。浑身の勇をふるひ突進して行く姿は、天晴れ化神の像だ。頼もしい限りです。

敵は我が軍間近く迫ると見ゆや、手榴弾を盛んに投げ出しました。一面土煙がバツクと立ち昇る。その間隙を縫ふ様にして、血しみがまみれ乍ら突進する戦友の姿が、私の位置から良く判ります。

三輪小隊の戦友達も、堤防に沿ってクリークに出て腰まで泥水につかいて猛射してまます。

迅速果敢に早や今村隊は双関鎮を占領しました。我々も敵前五〇〇米迄急進して前面に蠢く敵を攻患しました。

「日没ヲ期シ、更ニ当面ノ敵ヲ攻患シ、上河鎮東端附近ニ進出セントス」との命に

概り、遊敵物なき田圃の中を臂力搬送のまま各個躍進を以て、今村隊と同じ敵前五〇〇米の線まで前進しました。

この時、敵は田中隊の正面に向つて軽機重機迫撃砲の集中火を送つて居る。それにとまふので、私は今村隊の左に陣地を占領して、敵重火機に猛射を浴せ之を倒圧しました。敵退却の氣配を見て取つた今

村隊は、交錯する砲弾を物ともせず、敵陣地に肉迫し、右突角を占領。我々も速に之に続きました。

田中隊は左突角に突進を敢行して占領し、この何庄は難なく完全に占領されたのであります。

三輪小隊では分隊長松山、堂脇、須瀬三名の戦いで負傷しました。夜十一時、現在地ニ夜ヲ徹スベシとの命令を受

附近の部落を占領して掃蕩しました。敵
残兵は多いかには驚きました。

遠く南京城は赤い火煙が立ち上つて居る

砲弾はひっきりなしにうなる。流弾は飛ぶ

塵屋が焼け落ちる。かうした中で一週

間交代で至嚴な警戒裡に一夜を明かしまし

た。

十二日は未だ明けやらぬ中から敵は射うて

来ました。黙々と準備を整へた私達と三輪

小隊は大園隊に附して朝霧を踏みつ、上河

鎮に向ひました。

間もなく、右方川中島に敵は砲陣地を構築

中との報に、小川小隊はこの敵を攻撃して

潰滅させました。続いて我々は十一時頃

上河鎮南端の敵重火機陣地を発見して前川

隊と共に攻撃を開始しました。

大園隊は正面にクリークが多くて前進不能

のため三輪小隊と共に堤防に沿つて前川隊

の左に前進。敵の背後に進出して一斉に猛

射をし、敵陣を潰滅することができました。

この時牛島旅團長の訓示が傳達されました。

「古来勇武ヲ以テ天下ニ誇ル薩日鶴三州健

児ノ眞ノ特長ヲ發揮スルハ正ニ此ノ時ニ

在リ、各員勇戦奮闘第一南京城頭ニ日章

旗ヲ懸スベシ云々」

一同志気大いに振びました。完全に上河鎮

を占領して、同地北端で約三時間の大休止
を許されました。

△巻脚絆を解いて靴を脱ぎ、白くぶやく
にふやけた足を投げ出して、踏みつぶし
た。メカの手入をして居る者もありません。

△大園隊に向ふ武士のたしなみだと言ひつ
、背負袋から新しい襦袢を出して着て
みる。嬉しう兵も居ます。

合真意に汚れた千人針を伏し拜み 今一息だ
守り給へと締め直す敵友もあらず

△南京城までお伴はごめんだと 無心に息を

取って居る兵もありません

△水口曹長は部隊本部と連絡中顔に負傷され

たが 頑張つてとうとう 任務を完了された

した

又上一等兵は胸部に 坂本一等兵は横腹に

負傷したが、之も全く奇蹟に類するもので

生命に別條はない

午前三時闇の中を 江東門に向へて出発

念、最後の戦場だといふ気がひしく、と胸

に迫りました

薪り火の

煙

陽焼けの隙間

歩四五五六

一声

歩兵一等兵 我等の隊長

歩四五五七

歩兵軍曹 川上利雄

昭和十二年十二月十二日我が大隊が水西門
目かけてジリジリ肉迫すると 敵はろり

を楯に埋込を利用して頑強に應戦しました

弾は雨霰と頭を掠めます。夜に入つて

我が中隊は大隊命令に依り 前面の敵を夜

襲撃することに決しました。中隊は南と北

て夜襲の隊形をとる。我が第四分隊は小隊

の左列となり、其の左翼に第一小隊の右分

隊の頭となる

淡白い月の明にすかして見ると 楯ね彼我

の距離は五〇米までに接近してゐます

思ひ出したやうに臆病な敵が威嚇射撃をす

るたびに 自然した弾道がシエツタツと無
気味な音をたて、飛来します

だびそれも一しきり吠えとすく止みまし
た 誰だらう 私の肩のあたりでケウくと
斬をたて、おろ大膽な奴かおます

夜空に葉の樹の枝がバウ／＼葉を残して物
わびしく見える 戦国時代の野武士が感じ
た古城落月の風懐もこんなものではなかつ

たらうか 秋も終を告げた季節なのに虫が
氣息奄々として鳴いてゐるのも哀れをそ
ります

棉畑にヤモリの様に腹這ひになつたまゝ、
大きな呼吸をするとトツ／＼と躍る胸の
鼓動が聞きとれるほどです

静かな夜気を震はして 又銃声が起る
「今度こそ護國の輩と散るぞ」と思ひ目を
つぶれば 碧い沼が見える 敵陣の煙で

小夢色に陽焼けた顔に微笑を浮べて鉄を

握ってゐる母の懐しい姿がチラ／＼敵の森
に浮んで来ます

「分隊長殿」とすぐ後に居る林上等兵が私
語りました
「何か」と振向くと急言で私の顔をみつめ
ておます 月明りに彼の眸が火を小さく様
にキラ／＼燃えておます 「やるぞ」と急言
の微笑を交す

中隊長殿の大きな体がむくり起き上つた
手ざれた鞭がさつと頸上にあがりました
それつ 前進命令だ 剣が煌めく
土手を乗り越え 沼を横切る 黙として

道は敵前五十米 中隊長殿は大地を蹴って
走られる 何も考へない 黒いものが両脇
をとんでゆく 走った／＼ まつしぐらに

物凄く氣負つて突込んでみたら 敵は総退
却してしまつた後でした

血を見ずに敵陣を占領してしまつたのです

敵は我が夜襲に餘程あわてたものを見えて
装具など投棄せられ、炊き立ての飯も湯気が
たつておます

「とうだ、俺の夜襲は
と中隊長殿が微笑されました

敵陣目下に見る日高中隊長殿の姿は慈父のや
うに、いや神のやうに氣高いものに眺められ
ました

輝ける月も忘れて

風のざとたゞ選れりと

まつしぐらに馳く

敵中決死の連絡隊

歩四五、五七

宮内曹長

十二月十二日、所街の夜襲にみごと功を奏
した中隊は、引續いて江東門を一気呵成に

粉碎すべく鎮魂の觸の意気で猛進軍を開
始しました

小隊は所街の戦いに傷つた十一名の戦
友を残して来たので、僅か二個分隊とな
り、中隊主力と離れて、下関無電台の占
領を命ぜられました

ピエン／＼と金屬的な尾を引いて敵陣
が身を掠る、日常茶飯事の様に刺れた
音ですが、やはり良い氣持がするもので
はありません

横倒しになつた電柱の障礙物を乗り越え
て敵陣に突入する途端に、ブルランとい
ふと、来たと思つたら、敵砲弾が真暗闇の静け
さを劈いてドカーンと赤く炸裂しました

工兵營に引継ぎ無電台を完全に占領した
のは下関の四五でした、ほつと一息つ
いてあり、陣に、傳令が中隊命令を持って

来ました

「所街ニ残シテ傷者の護送ニ人員ノ不足アリ

リ 小隊長長以下七名ヲ速ニ所街ニ送ラシ

メヨシ」と言ふ命令であります

所街までには此処から五軒は十分にありますが

群がり寄せる敵敵の真只中を 慣れない地形

にしかも深夜であります じつとりと汗ばん

だ戦帽に風を入れるのも忘れた私は つま

つたま、見えない兵隊の顔を 一人々々胸

に描いてみました

「あの顔だつて…… あ奴だつて……」

お互に赤い血の通つてある兄弟です みすく

危険を熟知してお乍ら 頭から強制的に虎穴

に入りを強ふりは 人情として一應は遠巡せ

ざるを得ません

ふと傍を見ると 当時小隊長であつた前田少

尉殿が じつとうつぶされたまゝ、獨り感慨

に耽つて居られました 心がて小隊長殿はく

つと胆力のあつて 中隊命令の要旨と
話されました 小隊長殿の語尾が終りぬ
りには

「私に」と言つて前に進み出た兵があ

りました それは總監上管兵(當時)でした

彼がこの重任を果すと云ふのです

鬘髪を入れず 吾もわれもと怒にして長

以下七名の人員が揃ひました 七人日一

つの黒い塊となつて出発しました

腰を下すと 今迄ずつと張りつめておた

身体中の力が急に抜けていく様にぐつた

りとなつてしまふ しかし どうしても

七人の連絡隊のことか頭にこびりへいて

離れません 臉とどちると時聞の中と

手探りで黒牛の顔をなてるやうな恰好で

進む姿が眩る

山の中は草むす屋

海の中は水漬くかばね

大君の邊にこそ死なめ
かえりみはせし

残った戦友の口さついで流れる歌を聞いて
おれと 不覺にもたゞ涙もなく有難さ
赤なさに熱いものが胸にこみあげて来て
一晩中彼等の無事を祈りつ、けました
此の決死の白樺道終段は 敵を一蹴しつ、
翌朝無事所聞の目的を達成して悠々と全員
歸隊したのであります

南京附近の戦闘

歩四五・五

七中隊座談会より

新室中尉

した、が將軍山から叩かれ 迂回して黃
華門に迫る前夜 あわて、飯盒炊事をす
ことになりまし、西園上等兵は、安木上

等兵と二名分を一つの飯盒で炊き、それを
食つてしまひ、再び明いうちにも一度炊い
ておかうと後方にさがりました
そのうちに出發となり、人員を調べると一
名たらな

「西園 ムム」と声を限りに呼んでも判らぬ
「安木 お前が殺したのだ」と冗談に肩を
叩くと、とて心配して

「どうしても死体だけでも探し出してま
ま」と喜びながら、戦友等と三方に分れて
さがしに出かけました

三面米位後方のクリークに行つた安木がそ
のまま、出てまぬ、何もなく

「こゝに死んで居ます」とわめく、行つて
見れば、うつ伏した後姿もそっくりです

その死体を起して調べてみれば、それは似
て山につかぬ男、しかも中國兵でした
一同又がっかり、途方にくれてゐると

西園、奴大分遠くまで行つてわたらしく
向ふの方からノコノコと出て来ましたので
一同喜んだり、怒ったり、安本もやつと安
堵の胸を撫でおろしたといふやうなことも
ありました

笹原軍曹

七中隊が独立任務を帯びて、本道から右
にそれて迂回し、敵の側背に出た場のこと
であります

所街の手前まで進みました。一小隊は尖兵
となり、利富な負傷者を出し、攻車前進を
かゝか意、如く進移せぬため、中隊長殿が
夜襲を命ぜられました

私は大隊本部まで連絡に出されました。出
発するその時から、敵の銃声は全く豆を粒
るやうでした。まづすぐに走つて本部に至
り、更に引返して来ると、行く時にはあつ

た様か殺されてありませぬ、やむなくクリ
ークをじやぶく、滾つて歸りました

夜襲効を奏しまして、再び大隊本部に報告
ならびに誘導のためだけ、報告を終り
本道を走ると、右の方を通つて誘導しました

急電台のところを通り、下関に到れば、前
日負傷者を後送された准尉殿が追及されて
到着、そのお話に依れば、急造が避けて通
つて来た本道上には、地雷がとても澤山あ
つたとのこと、後で天祐だったとよろこ
びました

新里中尉

南京が西門ニ料ほどの所で、敵がゴソ
やつておきました。尖兵中隊や、大隊砲など
一番に射ちまくりました。その敵は南京我
導隊の兵でした

その折 某介係長以下全滅の報に接し とて
も心配しておりましたが、後で一二名の負傷を
誇張して傳へたものと判明して、ホツと安心
しました

奥田軍曹

下関の戦斗後、引きかへして上河鎮でのこと
であります

多分十二時頃だつたてせう、漸く宿營するこ
とになりましたが、水を汲むのがとて止苦勞
です

そこで宝来伍長が、難民中に一番役にたつた
うな若い奴をつれて来ました、「水を汲め」

と命ずれば、「いや」と首を横にふります

「この奴けしからぬやつ」とうんとおどしつけ

ておいて
「水を汲め、今度は野菜を取つて来い、次は
何だ、彼だ」と追ひ廻してこき使つてゐる

うち、とう／＼へたばつてしまひました
を、してしはらんして
「紙と書くものを貸してほし」と言ひ
ます、書かせてゐると

「自分は旅長である、降伏の意志をもつ
てこゝに留つてゐた、部下は解散しこ
しまひ、何處へ逃出したわからぬ

然し副官は尚難民の中にある筈だ

といふ意味のことを述べてゐます

それではと言ふわけで早速難民の中を
それらしきを探してみましたが、だめで

とう／＼判りませんでした

屋田准尉殿が、その夜は得意な支那語で

と、と訊かれました

旅長と言へば又したものの、苦力の仕事を

拒んだのも無理からぬ話でした

野元中尉

三十三師團と連絡のため聯絡弁候として
下関の敵海軍を司令部に行きすすと、そこには
防盾面とか種々なものから山ほどありました

九日頃南京東南にきたかゝると、友軍隊が東
方から来ました。敵高射砲は火をばき出して
来た。しかし友軍隊はそれを物とせす急降
下して、降伏勧告ビラを撒いておきました。其
の沈着豪傑さには五きれてしまひました。

放尿失敗談

歩四五、五、六

馬 飯生

十二月十二日 中隊は軍旗護衛中隊として進
軍中一五三〇。南京南郊江東門南方の一部落に
着きました。小休止のまゝ、なかく、出発とは
なり十一七三〇。頃漸く、小発準備の命令が下

りました。バタ／＼倒れたやうに道に溢
れておたれた。同は眼をさまし、出発準
備にとりかかりました。小便をしようにも
兵隊ばかりで場所がない。たゞ今まで渴をいやし
てくれた小池があるばかり。今まで誰か飲
らぬ者か、とを考へ、池などに小便した者は
ない。然しこの際だけは任方がなく一人がジヤ／＼
やりだしました。すると後から／＼大凡三十名
位が一時にホースを向けてしまひました。
ところが何たる皮肉、放尿が終った途端に
「出発は見合せ、ここで明日の昼食迄の飯を炊け
よの命が下りました。萬事休です。比呂の池の水
は使いたくないのですが、さりとて他に水は無い、少し後に
この水はありますが、兵隊が充滿して動けません
一人が「え、糞、メイラス」と言つてかさわけり
やうな恰好をして池の水で米を洗ひはじめ
ました。と又後から／＼メイラスを運来したから
米を洗ひ、水筒に湯を沸しました。

——獲風呂

恐怖を知らなかった小隊長殿

歩四五Ⅱ
BIA

下松曹長

私は親測班長として、常に故岩間大尉殿の後に従いました。今考へて之位剛膽な人は初めてありました。どんなに弾が飛んで来ようが一回も走らねた事がなく、又遠蔽して行ける様な低い所を歩かず、わがど高い所を歩かぬので、戦いが初まると私は自分の本職の親測はそっち除けて、小隊長殿、危険ですから、此方を行つて下さい。

と何時も、小隊長殿の進路偵察が仕事になつて居りました。

南京城、漢西門西方、江東門附近の戦いに

於て大隊は城内より潰走中の敵大部隊に遭遇（昭和十二年十二月十三日、午前八時頃）しました。

尖兵中隊は敵前五六十米に近接、小隊も同線上に進出しました。

何等の遠蔽物もない道路上に陣地突入しました。

小隊長殿は敵弾雨飛の中に鬼神のやうに、中腰のまま、姿勢を低くすることもなく、小隊を指揮して居られました。

射撃を開始すると同時に、数箇所にも重傷を受け、遂に名譽の戦死を遂げました。

平生は慈愛如く、一衣被せんとす、鬼神も避けるやうな、故岩間大尉殿の勇姿は、

終生私共の印象に残ることです。此の戦いで戦死傷六、死は二門共、敵弾を四五發受けました。

勇敵無比分隊長

歩四五直隊

下松曹長

昭和十二年十二月十三日 午前八時四十

分頃 南京城 漢西門西方 江東門附近に
於て 大隊は 域内より潰走中の敵大部隊
と遭遇しました

尖兵中隊は 敵前五六十米に近接して戦斗
を開始 小隊も状況上之と同線上に進出し
ましたか 何等の遮蔽物ともありません
道路上に陣地侵入し 射撃開始すや
偶々 小隊長殿以下 砲手数名敵弾に墜れま
した

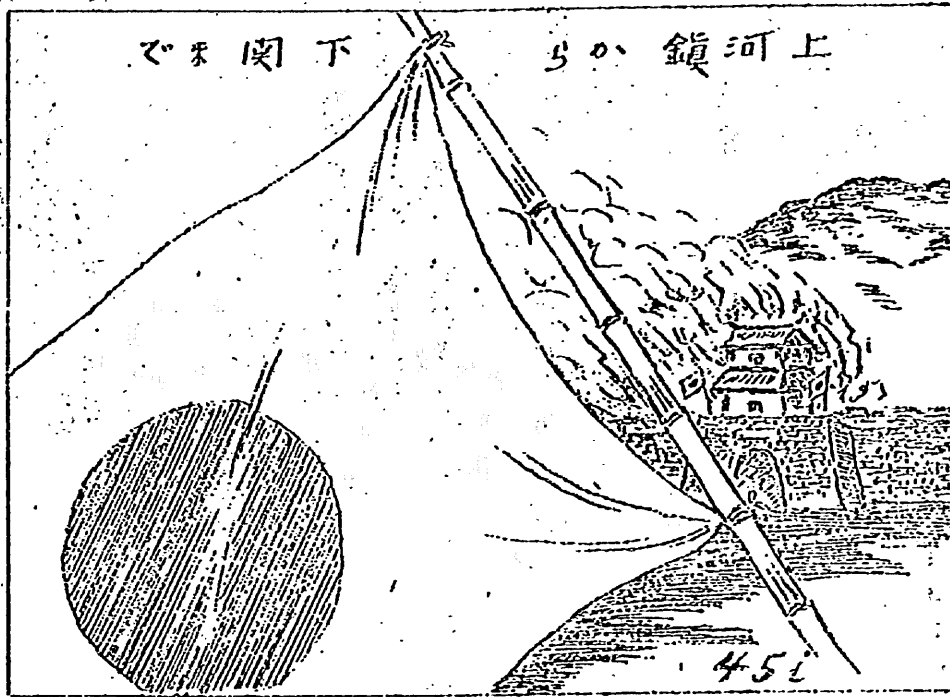
此の時 平素より勇敢な流合伍長は 第一
分隊長として 大膽にも敵弾雨轟の中に
折敷けの姿勢を以て 沈着に分隊長を指揮中
小隊長殿及砲手数名と相前後して 左眼
及左上膊部に負傷しましたが 毫も怯むこ
となく 顔面及左腕と鮮血に染めつゝ 尚
も部下分隊長を激励 而も適確に指揮して居
ました

小隊長代理たる松田曹長は 再三後退して
止血するよう命ぜられましたか

「今が一番大事な時機です 敵をやっつけ
てから やりませう」

と言つてさへ入ルず 愈々我に近接 右に
左に迂回し 我を包囲せんとする敵に猛射
を浴せ 終に尖兵中隊の突撃を成功せしめ
ました

負傷の身を忘れ 最後まで完全に任務を遂
行した伍長の 勇姿は今尚眼裏に残つて居ます



噫!! 上河鎮

歩留 四ノ二

歩兵軍曹 江口虎則

此処に三度大陸の春を迎へて、過ぎし激戦を次から次へと追想するに、ハット胸新に思い出すりは、かの上河鎮の激戦でありませす。

それは我歴史に耀しき一頁を揚げ長南京落城の直前、我に数十倍の敵大部隊を一期に果滅し皇軍の威武と薩南健児の意氣を遺憾なく發揮した。上河鎮の戦場を過ぎつ、壯烈無比巽並の礎石と散った大團隊長級以下勇士の面影を忍びつ、此処にパンを取ります。

昭和十二年十二月十三日の黎明は、遠くは

0489

近くに 幾く砲声の中に誘われんとしてゐる
項 敵の退路遮断の独立任務を帯いた我が
大園隊は 暗夜を期し目的地の基地に向
ひ前進致しました 其の尖兵小隊が上河鎮
本道に差掛るや
突然近くにこだまする銃声 忽ち響く軽機
の唸り

中隊長殿の命令一下 直ちに戦斗態勢をと
り 敵はと見れば 早目前至近の距離を石
往左往し 中には喊声を取りつゝ肉迫し来
る者 其の兵力實に三万の大部隊がある
我中隊は一丸となり 此処に大園隊の激戦
は展開されたのであります
敵は總て烏合の集りたるも 多勢を頼み我も
猛攻して来ました 時午前六時三十分
雨の如く飛來する彈雨 天地もゆもかす砲
弾手榴彈の炸裂
然し乍ら我々は断乎として決死の形相物邊

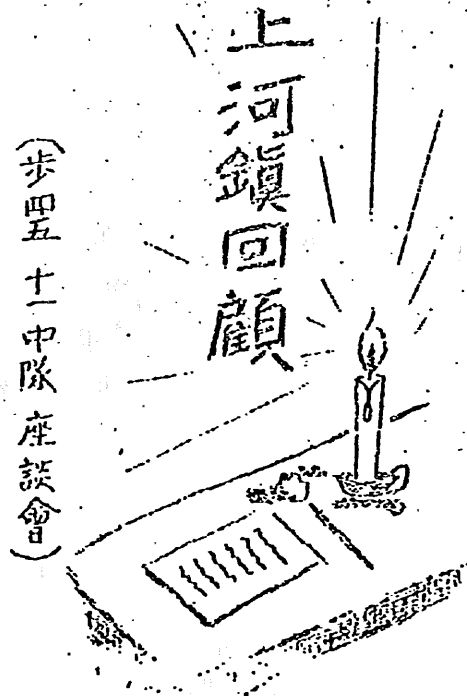
く射つてく射ちまくりました
戦は益々激烈凄絶を極め 中隊長殿は喉も
破れんばかりに必死の指揮をして居られま
した 雨の如く落下する彈雨と物ともせず
噴 其の人こそ上河鎮の花と散つた 大園
隊長其の人でありました

幾く銃砲声の中に 微かに聞ゆる隊長殿の
声 今想ひ出すも身の引緊きを感じざるを
得ません

戦い半にして散り行く隊長殿の胸中如何ぞ
漸く果の空も白み出し 敵は我が軍の猛攻
に耐へかね算を乱して敗退しました 我々
は今こそ尚も必死に 亡き隊長殿以下敢
多戦友の仇と 射つ 突く 華々しく戦ひ
ました

午前八時三十分頃後方部隊と連絡をとりま
した 奮斗約二時間巨に亘る激戦に 敵は生
々しい数々の死体と 山の様な兵器弾薬を

見るも無惨な敗戦振でありました
 此の上河鎮の激戦こそ、自分にとつて永久
 に忘れる事の出来ない轉戦の思い出でありま
 す



(歩四十一中隊座談會)

◇ 赤星中尉

上河鎮の激戦の発端とでも申しませうか
 私には冷水三斗の想出があります
 中隊も已に出発準備を整へてみました私
 は一人本道に出で、立哨中の歩哨を中隊

を誘導する為に戻しました
 人の気配がしますので、二三歩近づいて顔
 をずつと近づけて見ますと、先方でも無言
 の儘顔を覗く様に押しつけて参りました

「しまつた」 敵が丁

中央に將校、着剣した兵が三名、私の胸元
 に剣を突き付け、三方から取囲みました
 敵の將校は両手を腰に当て、反り身になつて
 息をと揃へてゐます

私は刀に手をかけ様と思ふが、動けは直ぐ
 やられぬ様な気がして、どうして、生き
 大心地は致しませぬ
 無言の對峙二三秒

突然、敵將校が一歩前に踏み出しました
 その左右の銃剣が將校の体で遠からぬ様
 な状態になりました

「今だ」と意を決した私は夢中で刀を左
 右に打ち振ると同時に、本道下の溝めかけ

て「敵襲々々」と

嗚鳴り乍ら飛び込みました

パン／＼と敵弾は私の頭上を掠りた

待機してみた中隊は直ぐ之に應戦したので

すが、總立ちにならうとする兵を倒して中

隊長殿が配置につけられました

その時既に数万の敵は本道上を前進、先の

路上將校半候の後方を續行してみたのです

やがて突雲ラツバを吹いて押し寄せて来ま

した。そして此處に破代入り乱れ、大激戦

が展開されたのであります

◇ 上岡曹長

「敵襲」と云ふ声と共にパン／＼と云ふ

銃声は、すばと全員散りました

そして地上すれ／＼に狙って射ちました

射くとも、後から／＼押し寄せて来る

弾がなくはなつて仕方がないので、前の戦友

の後益をコツツリ開けて射ちました

勇戦友のが居まして、友軍の軽機直

ぐ前まで、比手にモノセル拳銃を射ちつ、

手榴弾を振りおけて来るのが居ました

それを友軍は狙撃して斃してみましたが

何しろ我に数十倍する大軍ですから非常に

苦戦でした

◇ 赤星中尉

「全員此處で死ぬ」

「第三少隊長は、ど死ぬ」

「赤星少尉は其處で死ぬ」と

大園中隊長殿は路上で指揮をし乍ら叫び出

す「それとぎ、つ、皆

「ハイ」「ハイ」と

力強く答へました

身がシーンとなつてしまいました

◇ 上岡曹長

自分の体以後から倒れか、つて来たものがあるので

誰だらうと抱き起してみると中隊長殿

でした 見事な御最後でした

右耳から後頭部 鉄兜を打抜かれ居り此

ました

◇ 浜田准尉

其の前夜自分のケマン酒を

「もう一杯」 と

せがんで飲まれました どうしたものでか其

の夜は地圖を見て

「どうも方向の判定がつかぬ」と云ふ作ら

二回も逆に見て居ります 自分が

「こちらが北に居ります」と云つても

尚

「いや さうかぬ だがおかしいね」と

言つて居られました

予感とか云ふものがあるやうな気がします

勇敢だった

戦友の話

歩四五 四ノBIA

歩兵曹長 上釜正春

霜凍る昭和十二年十二月十日 歩兵四十

五聯隊は敵の退路遮断を命ぜられました

剋園附近の戦斗から 両方に轉戦し上河鎮

附近の頑敵を壊滅しつゝ、下関附近目指し

て進軍しました

曉の静けさを破る歩兵二十三聯隊の城壁占

領の感激深い萬歳を斜右の方向に聞き 松

達の意気はいやが上にも昂りました

電線と云ふ電線は全部切斷され 道路には
我軍の進軍を阻止せんが爲の障害物が徒に
彼地此地に横たへてあります

夜も明けまして丁度八時頃でした 朝食をしよ
うとしてみる時

大隊砲前へし の遮障が来ましたので
それつと 砲んで行きました

尖兵中隊の第九中隊が水面門の方から 退
却して来る約五千の敵と遭遇したので

豪勇を以て鳴る 私達の小隊長岩間中尉殿
は地形の関係上思ひ切つて 第一線に退出
され、直に陣地を占領し該敵に大隊砲の
猛射を浴せました

敵は唯一の退却路を遮斷されて、一時混乱
の状態と成りましたが 兵力の大きさを
でか尚後からく崩雲の如く前進しつてま
す

私達は機関銃と共に海中で猛射しました

至近距離のため 私達の砲弾で敵が冲天高
く飛ぶ上も様か午に取る様によくわがりま
す 表尺距離零米 無中で射つてみました
が 余りの乱射乱撃に砲身が焼けて薬莖が
出なくなりました

敵は小銃にも二三十米で空んに午榴弾
小銃 軽機等で抵抗してゐます

尖兵は突撃に移らんとしてゐます 勝敗の
分岐点とも云ふべき重大な時であります

此の時 日頃溫和しい川添一軍兵が雨霰の
如き敵弾の砲心来る中に 標桿を握つて仁
玉立ちに立ち上りました

皆 吃驚しました

伏せてゐても危険なりに無茶と云ひませう
か 悠々と砲口の前に立つて 持つてゐた
標桿で薬莖を突き出してゐます

薬莖は見事に取れました

其の時の嬉しさ 砲手は彼の勇敢さに感謝

七ッ、又も砲の釣狙射を續け、第九中隊の戦斗に充分協力する事が出来ました。戦い終つて敵の惨態たる死骸を眺めながら、川添一等兵の勇敢な働きに唯涙を以て感謝しました。

小隊長殿を初め、戦友三名が敵弾に襲われ、砲の防楯は敵弾の痕を残せしも、彼の川添一等兵は奇蹟的に微傷も負ひませんでした。神が彼の勇敢な働きに感じたのでしよう。神の加護としが思へません。日頃豪放な大隊長殿も、あの時許りは大隊砲の奮斗を心から褒めて下さいました。

退却の敵を撃つ

歩四五班ノ所
歩兵軍曹 久保園 茂

上河鎮附近の戦斗に疲果した揚句、

昭和十二年十二月十三日の朝、支那海軍刑務所附近に差しつか、り、聯隊旗の前を前進、聯隊本部は下園方面に、我等第三大隊は紅

東門へと前進しました。朝霧の中にはつきりと、南京城の城壁は丁度松林の如く聳へてみます。

その中を尖兵中隊第九中隊(前川隊)を先頭に前進中、前方から敗残兵らしい者が数名来ます。

敵のこの声に我等機関銃中隊は銃を卸下しました。が、敗残兵たこの報告に又銃を積んで、五十米も前進した。中に前方より一斉射薬を浴びせられました。

何葉ツと銃を卸下して應戦しました。火兵中隊は散開して應戦してみます。

私は二番銃手窪田上等兵と二人で、前方の一軒家に逃り着きました。

前方には敵が黒山の如く、敵の弾丸は雨の
様に墜んで来ます

平地にして南京よりの本道工です、我が分

隊の三脚弾薬手は前進出来ません

私と窪田上等兵は齒をギリ／＼かみしめて

ゐる時、小隊長殿が来られ

「オイ、久保園、四分隊は皆やられ、残

念だ」と

如何にも残念そうにして居られました

「小隊長殿(三輪少尉)久保園が行きます」と

云いました

「待つ／＼」と

滿州争奪以來戦斗に馴れてゐられる小隊長

殿は、私の前進を止められます、自分は残

念で居りません、私達の血は湧き肉躍るの

感が致しました

彈丸はなし、三脚も無し如何とも出来ず

其の時々ラリと、腦裡にいらめいたのは

何時か北支の演習で迫田隊長殿が教へられ
た、銃身の女の射撃演習が思ひ出され

「オイ、窪田どん、今日が最後だ、覚悟は

良いか、俺は独身だが若は妻があるか」

と云へば、窪田上等兵は

「何だ、日本軍人薩摩健兒だ、敵首都南京

ぢやないか、死んでも何の心残りはない」

「そうか、それなら良い、窪田どん、彈丸

／＼早く／＼とせよとりました

敵は五十米まで接近してゐます

友軍も次から次へ負傷者が出来ます

窪田上等兵は

「彈薬手／＼と連呼しますが、何処に

居るやら返答がありません、自分は前方の

敵を見つめて居りましたが、何処から探し

て来たのか四連の機関銃弾を見付けて来ま

したので、私は

「ヨシ、しめた」と

狂喜して銃に撃痕して、屋外に出ると、丁度良い都合にふさしを突き出した横木がありましたので、それに銃身を乗せて真黒な敵の群に機関銃の猛射を浴せました。敵との距離は近く命中率百パーセントです。四連の弾丸は一瞬にして射盡してしまいました。其の時第九中隊長前川大尉殿は負傷せられました。負傷せられ一度轉はれましたが再び刀をたよりに立上つて部下を激励されり姿は鬼神の様でありました。自分は射撃終つて家の中に入りました。四分隊の銃の側には四分隊の戦友、大城、福元、廣脇、宿口上等兵等は負傷して倒れ、銃だけか空しく敵の方を向てみます。「おい、戦友心配するな、久保園が来たぞ。俺の分隊はどうしても前進出来ぬ、弾薬脚もない、お前達の銃で俺が射つからな。」

「心せよ」と云へば、「おい、久保園、俺達の銃は故障だ、お前達の銃身をつけて射つてくれ」と息も絶え、バ、に云ふのです。心の中は鉄の火柱のやうに焼けてみます。四分隊の銃側には一箱の弾薬がありました。五十米前方の敵に對して我機銃は猛烈に火を吐き出しました。敵も一時は沈黙した様に見えました。其の時大隊砲小隊長岩間中尉殿は花々しい戦死をされました。大隊砲の砲身も「天皇陛下萬歳」と残して倒れ、到る処に敵も味方も倒れて悲惨な光景です。やがて分隊の榮上等兵一名到着致しました。私は銃身をかつき、二番銃手は脚を持つて二十米位前進して家まで行きました。其処には小銃の小隊が敵と相對して居ます。小隊長殿は血刀提げて仁王様のやうにつ、

立ち上り居られます

私は銃を振えました 前方を見ると三十米程先に自分と同じ様にケエツユを振えろの
が見えます 良き相手と私は機を逸せず射
撃を開始しました 敵は地物を利用して
我が射撃を避けてみます 弾着良好なれど
思小様に命中しません

「オ、窪田どん今日の俺のはどうして中
らんのかね」と云へば

「弾着はよいぞ あせるな 今度頭を出し
たら命中するよ」と勵まされ 射撃す

る事六回にして 其のケエツユを制壓する
事が出来ました

敵の午前には手榴弾班と云うのでせう 手
榴弾のみ握って我に抗つて来る者もあり

それは小銃が狙撃してくれました

敵は南京城占領されて退却の道なく紅東門
より自分達の個所を突破しなげれば退却の

の途がありませんので却て頑強に抵抗しま
す

我々の一ヶ中隊に対して三万伍千敵は居り
ます

午前七時頃より午後一時頃に漸く敵情も平
穏となりました 朝食をして寝たかつたの
で其の時始めて忘れたおた空腹が 一変に
饑い掛つて来ました

戦斗後の勝利の気持 何人とも云へないが
其の一面幾多戦友の犠牲を思ふ時 或る寂
しい気持を感じるものです

陥落の南京城

夕時雨

上河鎮の激戦から

下関附近まで

歩四五 Ⅲ、Ⅳ

歩兵軍曹 西 盛義

十二月十三日拂曉 部隊は上河鎮から江東門に向ふ時でした。突然正面より例のテラ／＼喇叭をふいて敵大軍が突襲して参りました。

道路上に待機してゐた尖兵の前川隊と小川小隊は、日頃の予練銃を据へるが早いかこの敵に猛射を集中しました。前川隊長は先頭に立つて突入さします。我連れじと將兵一團と成つて突入一大修羅場が展開しました。其処にも彼処にも 遠くにも近くにも

ハイツ／＼と云ふ喊声、剣戟の響き、火花を散らす様子を壯烈な白兵戦が間断なく續けられます。

息詰る様な争斗です。

工煙砂煙 血しぶき もう一人として血塗磨所らざる者はありません。

敵は又々新手を加へて押し寄せて来ました。我々の愛銃は猛烈と之に應じます。敵はむと見るや友軍再び銃剣を振つての肉弾戦です。

文字通りの乱戦混戦です。死斗又死斗。兇鬼の如く成つて荒廻る斬友達の銃剣のものと、敵の屍は山と折り重なり、血は流れて木も草も田も道も赤く染めて行きます。然し我に数倍する敵は、三度四度猛烈な勢で逆襲して来ました。死物狂ひです。奇声を張り上げつゝ、入り寄り立ち寄り、突に良く手榴弾を投げました。

無念にも友軍の死傷者も刻々数を増し、悲痛は萬感の叫びが銃声をぬぐって聞えます。もうその頃は無我夢中でした。

先頭にあつて指揮して居られた前川隊長殿も斃れられたと聞きました。これに憤激した將兵は火の玉となつて阿修羅の如く荒れ狂いました。

戦場が少し整理された時、部隊本部は敵の右側より猛烈な斜射を浴せて居ました。

三輪小隊は小川小隊の左側前方一軒家附近に進出して應戦しました。その時谷口分隊は勇敢にも道路上に飛び出し猛烈に射ち捲つて居りました。敵は早くも之を察見して、大器を揃へて集中します。

危い、と云小間もありません。廣脇 大城 宿口 福久と谷上等兵が次ぎぐに傷つき斃れに行きます。應援に行き度いバツ立の孫兵敵陣下です。

如何ともする事が出来ませんでした。

この有様を見た宮崎分隊は意を決して、各個躍進で前進し始めました。銃音があつた。

久保園上等兵が先ず辿り着きました。その後が續きません。銃架は未だ到着しません。

吐嗟の機轉、銃身を堤防に据へて射撃をして居ます。前方三十米電柱を藪に崖地を利

用した敵重火機は、久保園上等兵の不意の射撃で沈黙しました。

谷口分隊の徳重伍長も遂に腹部に一弾を後

け、傷つき乍ら射撃を止めませんでした。

この向歩兵砲隊長、岩間少尉殿も戦死されましたので、中村隊長は三部隊を指揮して居られました。

田畑小隊は彈雨を冒して彈藥を補充し、我々の活動を有利に導きました。

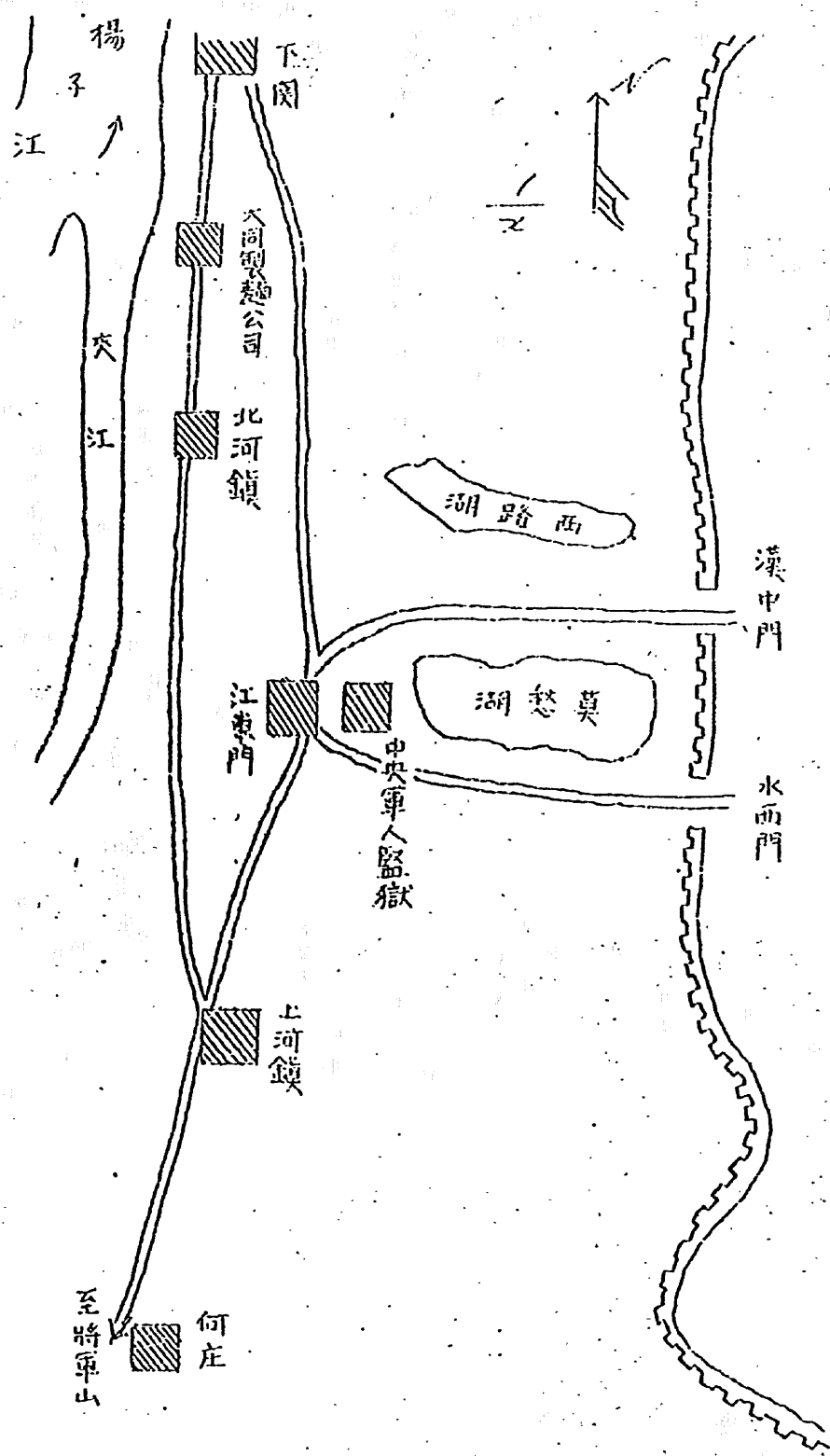
斯くて頑強に抵抗した敵の陣地も、我々の猛射に次ぐ、小銃部隊の突撃で一ツツ

極射に次ぐ、小銃部隊の突撃で一ツツ

此我が手に占られ 敵最後の死物狂の戦意も漸次 泡の如く消え去るかの様に見えました。右往左往逃げまどふ敵に我が銃火は追いつがる様に之を殲滅しました。数午の死屍は一面を黒一色に塗りつぶしその壯觀言語に絶するものがあります。折しも南京城頭には數十旗の日章旗がはた<と離つてみる。吾「勝り」と云ふ感激に胸も張り裂くばかりでした。任務を完了した喜悦の涙でしようか。それ共多くの戦友を失った悲嘆の涙でしようか。涙の判らぬ涙がこみ上げて来ると仕方がありませんでした。戦友達のよこした頬にも 皆涙がたつて見えましました。

抑え私の御話ばかりに情景を美化してし

まみしました。実際はお話になら程きた斤らしいものでした。どの戦友も皆悉く臭気ぶんく鼻をつくといつた有様です。汗やよこ水計りではありません。皆一様に糞まみれです。向しう数万の敵軍が頑張った陣地です。そこを低い所<と選んでは伏せ 匍匐しては進みます。無我夢中です。ピタリと附けた銃砲にはもうベツトリと付いて居ます。胸と言はず 腕と言はず 体一面泥圓子の様に附いてみる。後にも先にも此ん斥抗日毎日の奠攻めに會つた事はありません。戦いすんでホット一息 生きても居たぞと自分に戻つた時 臭い事<支那兵のたと思ひますと 一層臭く痛に障つて仕方がありませんでした。



(南京域内)

0502

56

部隊は息つく間もなく北河鎮に向つて急追の午を繰めません。鱒小隊は尖兵中隊配属となり己に島地に陣地進入して居ります。有村小隊は五中隊の掩護で猛射を續けて居ります。三又河附近の大同麵粉会社の倉庫からは無数の銃眼が我々に最後の火蓋を切つて居ります。敵敵乍ら敵の陣地は堅固です。私共は遮蔽し乍ら早速陣地を構築し初めました。丁度其の時後方から山砲隊が附近に進出して掩護を初めました。我々も此川に勢を得て遮蔽する丈の陣地が出来ると。即座に猛射を浴せました。然し敵もさる者。迫撃砲、ケエツコで一斉に應戦。特に山砲陣地に火力を集中します。我山砲は入神の早術で失継早に巨弾を打ち込んで居りました。敵迫撃砲陣が砲列間近に炸裂したと思つた瞬間、砲員全部

アツト云ふ固に打ち倒されました。砲煙消えやらぬ中から分隊長らしい人がふら／＼と立ち上りました。全身血塗れです。左手で顔面の血しぼきをサツト拭きました。一人で弾を装填してみる様です。大きな号令が聞えました。耳をつんざく発射音。憤怒に燃えたる形相物凄く。一人で悲憤の砲撃を續くる此の山砲兵の鬼神の如き働きに。私達は自分の任務も忘れて、暫くみいられた様だ。その一挙一動を見守りました。初めて見る他兵士の如き悲愴絶。鬼神をも泣しむる勇敢な働きに。只々頭の下る思いが致しました。かゝる勇猛な攻勢に敵はかぬ。倉庫附近の敵は驚を亂して退却し始めました。黒瀬分隊は一気に飛び出し之の敵敵に猛火を浴せ

0503

57

私共も何処をどう走つたか判らない 兎に
前逃りまじり敵を迫りて 射つてく射ち
捲りました

敵百の敵死体を踏み越え乗り越え何時の間
にか楊子江岸に出ました 江上を見れば銃
に戸極に 小舟に蟻の様にかつた敵兵が
逃走をくわだて、居る

愛機は快調の火を吐く 敵の集団は次々く
に又の影を水底に没して行きます

楊子江上には早我海軍の 来る様子

これとも予旗信号により連絡もとれまして
敵は完全に退路を断たれたのです

前進命令に依り焼け落ちる製糖公司を後方
に見乍ら 気力なき敵の逆襲を排斥しつ、
工兵の手に依つて急造された 敵死体の橋
とも云小可き気味悪い橋を渡つて敵名部落
に入りまして

此地で大休止 夕食を炊いて連日連夜の疲

を休めました

南京城外にまだ赤々と燃えて居ります

思い出し兵様に流弾がこぼれず

抜けられた逆襲もありました

銃相手にせずと云つた形で皆グク寝て
居ました

私が四度目に立哨する頃夜が明け初めまし
たが その頃から白旗を先頭に三々五々列

をなして降参して参りました

此等の武装解除をして 本隊に申送るのも

却々忙しい仕事でした

下関に行つて驚いた事には 敵の戦車野砲

自動車 小銃重機弾薬 其の他の物資がそ

れこぎ山の様に散乱して居る事でした

捕虜は四列に列ばせて申送り 完全に下関

を掃蕩し 海軍陸戦隊の高威の戸を後にし

て 糧かしい太陽を仰ぶつ、主力部隊の集

結地である中央軍人監獄の広場に帰りました

抗日蔣政權潰滅の日です。私共は戦友と初
めて今は亡き多くの戦友の奮戦最後の様を
語り合ふ心の余祐を見出しました。
そして心から此等尊き犠牲者の冥福を祈り
ました。

敵乍ら天晴れ

歩四五 Ⅲ一。

歩兵軍曹 西田 盛

十二月十二日遙か前方に首都南京城が見
え。我々の志気は益々高まり、各部隊は死
を争つたの大進軍です。
其の時私達の部隊は敵の退路を遮断すべき
重た任務を受け、下関方面に轉進致しま
した。揚子江の一支流に沿つて前進しまし
たが、前後左右何処へ行つても大激戦が展
開されておりました。

私の部隊は正面の敵を裏破しつ、一巻任
務に向ひ進軍を續行しました。

十三日の早朝濃霧を突いて前進中、前方か
ら大部隊が前進して来ます。濃霧の爲彼
我の判別がつきません。

僅か三三十米位接近して

「敵だッ」と云ふ事が判り

あつて、突撃する者、射垂する者、各個バ
ラ／＼になつて至る所で白兵戦が展開され
ました。

敵も全く不意を蒙られ、奇声を発し逃げま
まど。それを切る安く、一瞬にして呵鼻
叫喊の巻と化しました。

見ると息絶え／＼の敵員傷兵が全力を盡し
て手榴弾を投げつておます。其の一発が反軍
の五六名密集してゐる所に炸裂して若干の
員傷者が出ました。

あり勇敢な行動は、敵乍ら実に天晴れものだ

し天
私達の交戦が終る頃は濃霧も晴渡り 眺む
れば遙か南京城頭には日章旗がハタ／＼と
翻つてみました
実に何とも云へない感激でありました

座談會記

(歩四五 五ノ六)

○ 後藤軍曹

乍候として南京の埠頭に出 海軍の者が
内火艇でやつてくるのに逢ました 立派に
肥えた兵達の血色のいいさまを眺め
「海軍にはヨカニセ(好男子)が多いね」
と言ひながら 戦友の顔面 凹んだ眼 汚

肌はてた肌を見て 苦笑してしまいました

○ 末永軍曹

乍候長として刑務所のとこから出発し
た折のこと 路傍に敵兵が居ますが射すは
友軍の中るかち知れず 見逃しと前進しま
した 固もなく引返し命令に接して後退し
後でそれが五百程の敵の大部隊の一部であ
ったのと知り ドキツとしました

○ 下園上等兵

三千の捕虜を見て 良い指揮者でもあつ
たら相當なものだがと空恐しいやり 団体
観念の厚さに呆るやり

○ 鞍掛軍曹

掩蓋壕の中の敵を次々と引はり出して斬
つてみるうち 突然轟然と音がしました

0506

69

敵兵が自ら手榴弾を以て爆死したのでした。

苦力閣下

歩四五ノ七 笹原軍曹

敵の牙城南京陥落の日、幸でありました。下関の掃蕩戦に敗走する敵兵は、我が迅速なる急進軍に殆んど為すところを知らず、遂に支離滅裂となり、大部分の敵は捕虜として捕虜收容所に收容しました。世界戦史にかつてない無類の敵首都南京入城の金文宝塔を企圖した大隊は南京の西北方約四料にあつた上河鎮に一泊して、此処で戦塵を捲いて英気を養ふ小軍になりました。紫蘇色の夕靄が家屋の軒並に深小境、自分の戦友宝米君が、附近の難民区から一見四才前後の男を

「そう、苦力代用だぞ」と云って連れ来てました。

六尺五寸の大男で、偉丈夫と云つた形容詞の方がピッタリと當てはまる位、何処となく人品の具つた男でありました。

余り乗氣でないらしい奴をせきたて、室内外の清掃は勿論、便所まで隈なくやらして、水汲までやつてもらふ。

二回三回までは水運ぶもどうかかやり通した。一回目頃になると額に皺を寄せ、肩が痛むと云ひ出しました。

宝米君は馴れたもので、拳固一つユツンと進上に及んだ。

すると苦力は筆致の拜借を所望します。借してやると

「私は日本軍に告白の意志あり」と達筆ですらくと書きました。

「奇妙な奴だナ」と覗くと

私は今迄南京に居り、支那軍の陸軍少將
で、直轄領袖麾下の親衛軍旅團長として
戦線に参加して参りました。然し最早蔣政
権崩壊の情勢を目の辺り見れば、潔く鬼
を脱します」と

書き足した

室原五と私は何時の間にか顔を見會せてぬ
ました。早速中隊本部に連行すると支那語
に通じ、兵隊の諷刺を聞き取った後、將校待遇
の食事を弁へたら、余程空腹だったと見え
て一物も残さず食ひました

この苦力閣下は六隊本部を経て聯隊本部に
上送と云つた模様で、其の後、彼に就いて
は皆目知りません

當時の事を思い出し、敗戦の將の
生きんが爲に、苦力をで瀕落した慘事に憐
憫の情を禁じ得ませんでした

續き、皇軍を惟ふとき、一心同体大志の御
捕となり、命令一下荒蕩として九段の華と
散る身に生れた事を感謝してゐます

敗残兵

歩四五ノ七 牧野軍曹

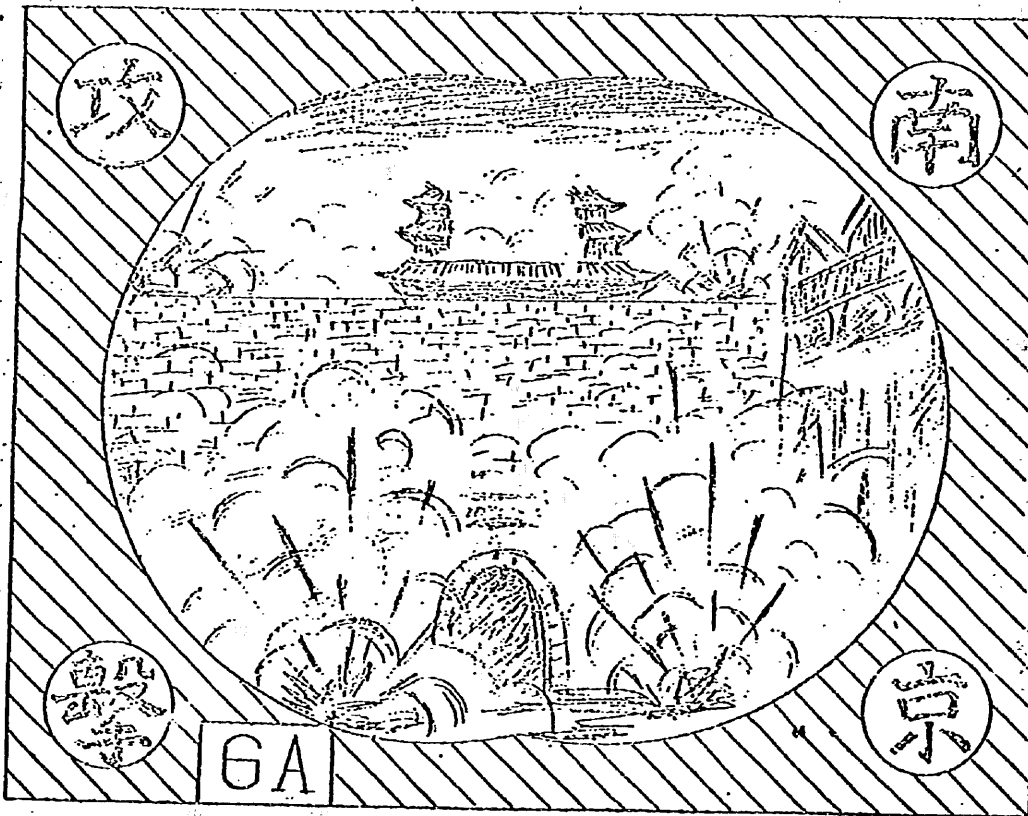
下関掃蕩の時でした

我部隊の退路遮断に敵は逃場を失つて袋の
鼠同然となりました

下関に這入ると間もなく多数の兵器を鹵獲
した上に、敵兵数百名を捕虜としました

それより中隊は、部落内に敗残兵が居ると
の事で掃蕩に移りました。すると家の中に六名

の敗残兵が盛んに食事をしてゐます。不意で
したのが、むかふ事もおらず呆然とし、
此の生死の境に、下まつて食事してゐるケマン
コロを前にして、此の呑気なのに、私達の今迄
張つてゐた骨中の神経が弛んで思はず苦笑しました



9	8	7	6	5	4	3	2	1				
闇夜の連絡	戦友は間もなく斃る	一本の煙草を分けた	愛馬を氣遣ふ	煙草で補虜にする	戦意なき敵を	花光號よ末期の水だ	萃々こかった対砲兵戦	それ遼傳だと猛攻	電話線は切断された	敵弾下の電話敷設	人にも分らぬ軍馬の友情	
18	17	16	15	14	13	12	11	10				
交響音楽	無念と感激の	南京落城の感激	中華門三條の突進路	決死の城壁破壊	失敗った接續した	線は他中隊に通じた	温情に感謝	歩兵大隊長殿の	友軍機の活躍	死傷續出に	闘志愈々益々なり	噫藤井隊長

目

次